

## Ⅱ.見守り組織ボランティア育成への効果的な研修プログラム 「ドラマティック・リリーフ体験」の実施と評価

### 1. はじめに

平成 20 年度の研究報告(須磨区版)より、地域住民が行う高齢者のための見守り活動において、活用しやすい判断基準の整備が必要であることが明らかにされた。

そこで、平成 22 年度は、前年度に引き続き、神戸市須磨区の高齢者地域見守りネットワーク関係者(住民)を対象とした研修会を開催した。

21 年度及び 22 年度の研修プログラムの目的は、見守り組織ボランティア(住民)が、セルフ・ネグレクト状態(特に危機的状态に陥った本人及び介護者)の早期発見の方法等についてその重要性を再認識し、主体的な見守り活動姿勢を引き出すことであった。研究者らは、21 年度に実施評価した研修プログラムを踏まえ、新たに参加・体験型プログラムとして「ドラマティック・リリーフ体験」研修を作成した。(表 1)

以下本研修プログラムの内容及びその有用性について分析したので報告する。

表 1 研修会の構成

時間	内容
10 分	オリエンテーション ミニレクチャー『セルフ・ネグレクトについて』
15 分	ドラマティック・リリーフ体験
20 分	グループワーク:話し合いと発表
15 分	見守りチェックシート試用に際しての説明
5 分	研修アンケート記載

### 2. 目的・方法

#### 1)目的

高齢者のセルフ・ネグレクトおよび孤立死を防ぐための地域見守り組織のあり方について検討し、住民の主体的活動姿勢を引き出すことである。具体的目標は以下のとおりである。

- ①セルフ・ネグレクト状態等の高齢者の早期把握のために求められている地域見守り組織のあり方(特に危機的状态に陥った本人及び介護者の早期発見の方法等)について検討する。
- ②セルフ・ネグレクト状態にある高齢者や周囲の者の状態(状況)を疑似体験することにより、より具体的に見守り活動(訪問等)の必要性や、地域でのネットワーク構築の必要性を検討することができる。

#### 2)方法

##### (1)研修プログラムの対象者及び、研修方法

①対象者は下記のとおりである。

- 1)神戸市須磨区の地域見守りネットワーク関係者(住民)31 名
- 2)区社会福祉協議会職員・地域包括支援センター職員

②研修プログラムの実施:芸西村において 2 回の研修会を開催しグループインタビューを実施した。実施した 2 回の研修会は以下のとおりである。

- ・ 第1回研修会9月(研修プログラムの実施)ここでは主に、「ドラマティック・リリーフ体験」と体験後の意見交換等を行った。
- ・ 第2回研修会2月(研修プログラム評価・見守りチェックシート試用後の意見交換含む)ここでは主に、「ドラマティック・リリーフ体験」後の意識や行動の変化等についての意見交換や、「見守りチェックシート」等を活用しながら進める判断基準について検討した。

表2 第1回研修会グループワーク内容

<p>セルフ・ネグレクトをテーマとした、ドラマティック・リリーフ体験の紹介</p>	<p>主人公の友蔵さんは、妻に先立たれ1人暮らしをしている。息子夫婦は別居しており、時々電話してくれるが、友蔵さんは自分の気持ちをうまく伝えられない。</p> <p>囲碁教室に通ってみたが、周囲の人に馴染めず、最近はずっかり足が遠のいている。</p> <p>そんなある日、友蔵さん宅にセールスマンが訪ねてくる。最初は敬遠していた友蔵さんだったが、自分の話を一生懸命聴いてくれるセールスマンに親しみを感じ、商品購入の手続きをしてしまう。</p> <p>数日後、商品代金は引き落とされたが、商品は届かなかった。実は、セールスマンは詐欺師で、警察からも注意を呼びかけられていた人物だった。</p> <p>友蔵さんは、詐欺にあったことを誰にも言えず、ますます家に引きこもるようになった。</p> <p>3ヵ月後、民生委員と見守りボランティアが友蔵さん宅を訪問してきた。暮らしぶりを尋ね、老人会を勧めてくれる二人にも、そっけない対応しかしない友蔵さん。</p> <p>友蔵さんの不潔な身なり・散らかった家の様子、『見知らぬ男が友蔵さん宅に出入りしていた』という近所の人からの話に心配しながら、二人は帰っていく。</p> <p>*研修参加者それぞれが、上記の登場人物の配役を決め演じる。配役に当たらなかった者は、観客としての立場で参加する。</p>
<p>グループワーク</p>	<p>①友蔵さんのどんどころが気になりましたか。(10分)</p> <p>②あなたが、以下の立場ならどのような対応をすればよかったですか。(10分)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・友蔵さん本人</li> <li>・息子夫婦</li> <li>・囲碁教室の仲間</li> <li>・近所の人</li> <li>・民生委員や見守りボランティア</li> </ul>

## (2)シナリオ構成・意図

本プログラムで活用したシナリオの構成及び意図は以下のとおりである。

### <シナリオの構成>

#### ①一般的な高齢者(特に男性)像として意図した点

##### 家事能力の低さ

- ・ 家事を妻に任せきりで生きてきたため、家事能力が非常に低い。

##### 近隣との関係が未確立

- ・ 仕事を中心とした生活を送ってきたため、近隣には友人が少ない。
- ・ 従来のつきあいのない地域で、高齢になってから友人をつくらうとしても、その機会は少なく友人作りは困難である。

##### 非社交性、プライドの高さ

- ・ 「おしゃべり」が苦手で、自分の気持ちをうまく周囲に伝えることができない。
- ・ 新しい場所に出かけ、馴染んでいくために結構な努力が必要である。

- ・「さびしい」「つらい」というマイナス感情を、悪いもの・恥として捉えている。  
→「大丈夫」「関わってもらいたくない」と言っている、内心はさびしいこともある。

## ②周囲の状況

### 家族(子ども)

- ・決して気にしていないわけではない。
- ・しかし、親元を頻回に訪れる時間的余裕・金銭的に援助できる経済的余裕はない。

### 近隣者

- ・長いつきあいではない(主に、退職後からのつきあい)ため、お互い遠慮がちである。
- ・そのため、気になることがあっても、踏み込んで行けない。

### 民生委員や見守りボランティア

- ・セルフ・ネグレクト状態を見る視点は育ってきており、問題意識もある。
- ・現実に対応するのは初めてであり、具体的な対応方法がわからない。

## ③セルフ・ネグレクトになっていく過程

- ・重大な出来事に遭遇したことからセルフ・ネグレクトに陥る場合もあるが、多くは、どこにでも起こりうる出来事が重なっていき、次第にセルフ・ネグレクト状態になる。
- ・次第にセルフ・ネグレクト状態に陥るため、関わりが非常に困難になってから、ようやく周囲が気付くことも多い。

## <シナリオ作成で意図したこと>

### ①今の一般的な高齢者、特に男性像を表現した

- ・女性は、家事能力がある程度は身につけており、概して「おしゃべり好き」である。
- ・平均寿命は女性の方が長く、高齢単身女性(子どもがいても別居)は多い。同じ立場の人と、おしゃべりの機会を持ったりして、結構充実している。しかしながら、男性は、上記2点においても、女性に劣っているので、主人公は男性とする方が一般化しやすいと考えた。
- ・仕事中心で生きてきて、近所の友人は少ない。離れたところにいる仕事仲間は、ADL 低下とともに疎遠になっている可能性大きと推測される。
- ・今までのつながりのない地域(自分の住居周辺)で、高齢になってから友人を作る機会は少なく、新しいつながりは築きにくい。
- ・家事能力が低いので(若い男性はまた違うかも)、妻に先立たれると、とたんにお荷物状態。
- ・うまく自分のつらさ・寂しさを伝えられない。おしゃべりが苦手・マイナスの心情を「恥」と思い込んでいる。「大丈夫」「関わっていらん」といってもいても、実は心の中はさびしい・・・ことをわかってほしいとの思いがある。

### ②周囲の状況

#### 子ども(別居家族)

- ・決して気にしていないわけではないが、親にべったり関わられるほど時間も、金銭的余裕もない。
- ・子どもは気にしているかも知れないが、配偶者となると「やっぱり他人よね」と、関心うすい。

#### 近隣者

- ・囲碁教室で知り合っても、そんな深い(長い)付き合いではないので、遠慮がち。気にならないわけではないが踏み込めない。

#### 民生委員や見守りボランティア

- ・セルフ・ネグレクト状態をみる視点は、なんとなく育っているし、気にしている。
- ・行政等との連携ができれば、というところ

### ③セルフ・ネグレクトになっていく過程

- ・大きなことがひとつ起こるというより、よくあることがじわじわと起こってなる  
(妻の死→囲碁教室で浮いている自分。張り合いなく、受診も滞りがち→詐欺にあう)
- ・じわじわと起こるので、一気には気づきにくい。気づいたら手遅れということもある。

### (3)分析手法

分析における素材は、①対象者の発言やグループインタビュー内容を録音したテープとフィールドノート記録より作成した逐語記録、②対象者より提出されたチェックシート内容(自由記事項含む)であった。これらは、2回実施した研修会で得られた。

具体的な分析方法としては、各研修のグループワークや全体発表での対象者の発言内容をICレコーダに録音し、録音した内容をフィールド記録と照らし合わせて逐語録に書き起し、文脈がわかるように記録した。その後、複数の研究者で、できるだけ対象者の表現を活用しコード化した。それらのコードをもとに、サブカテゴリー、カテゴリーへと抽象化を進め分類を行った。

### (4)倫理的配慮

研究対象となった参加者には第1回研修会時に書面と口頭で本研究の趣旨、目的と方法を説明し同意を得た。また、研究協力は自由意思に基づくものであり、いつでも中止が可能であること、研究目的以外では得られたデータは使用しないことを説明した。なお、本研究は甲南女子大学研究倫理委員会の承諾を得ている。

## 3. 結果

### 1)研修会の内容と方法

#### (1)第1回研修会

第1回研修会の趣旨は、①セルフ・ネグレクト状態等の高齢者の早期把握のために求められている地域見守り組織のあり方(特に危機的状態に陥った本人及び介護者の早期発見の方法等)について検討する。②セルフ・ネグレクト状態にある高齢者や周囲の者の状態(状況)を疑似体験することにより、より具体的に見守り活動(訪問等)の必要性や、地域でのネットワーク構築の必要性を検討することができる、というものであった。

研修会のプログラムの流れは、表1のとおりであり、60分で実施した。研修プログラムの構成は、セルフ・ネグレクトをテーマとしたドラマティック・リリーフ体験を実施した後のグループワーク(第1部)と、見守りチェックシート試用についての説明(第2部)から構成されている。

研修会第1部のグループワークの内容は、表2に示す。グループワークではまず、友蔵さんの気になるところについて検討した。次に、研修参加者自身が友蔵さん本人・息子夫婦・囲碁教室の仲間・近所の人・民生委員や見守りボランティアであった場合を想定し、それぞれの立場から話し合ってもらった後全体発表を行った。なお研究者は、グループの発言が活発に表出されるようファシリテータ役を務めた。

研修会第2部では、本研究班で試験的に作成した見守りチェックシート(改訂版)の活用方法について対象者に説明し、近隣の高齢者の生活状況をチェックシートにそって把握してもらい、10月末までに地区代表者(民生児童委員)まで提出してもらうよう依頼した。見守りチェックシートは41項目のチェック項目から構成され、住民自身が該当する高齢者への対応として、「普段どおり、挨拶や声かける」「訪問したり、電話をかけて様子を見る」、「地域包括支援センターに相談する」などの中から選んでもらうことにした。

なお、見守りチェックシートの使い方については、住民の理解を促すために、模擬事例を示し、説明時に見守りチェックシートの各項目にあてはまると考えられる部分を住民とともに確認した。

#### (2)第2回研修会

第2回研修会は、平成23年2月に実施した。

対象者は、第1回研修会に参加しチェックシート試用に協力いただいた対象者である。

第2回研修会の趣旨は、第2回研修会1月(研修プログラム評価・見守りチェックシート試用後の意見交換含む)ここでは主に、「ドラマティック・リリーフ体験」後の意識や行動の変化等についての意見交換や、「見守りチェックリスト」等を活用しながら進める判断基準について検討することである。

った。

はじめに研究者から、以下の 2 点について概要報告した。①見守りチェックシート試用後のアンケート結果(シートの回収状況と集計結果の概要説明、須磨区での活動状況等)②「ドラマティック・リリーフ体験」後のアンケート結果。次に、協力者から、①チェックシートを用いて支援した見守り対象者の状況や支援プロセス、試用後の感想(改善点やアイデア含む)等、②「ドラマティック・リリーフ体験」後の意識や行動の変化等についてグループワークを実施した。第 1 回研修会と同様、全体で発表を行い、研究者がファシリテータ役を務めた。

## 2)第 1 回研修会におけるグループインタビュー等の分析結果

研修会参加者は、シナリオ(「ドラマティック・リリーフ体験」)の事例に関する意見や感想の中で、単に他の地域で発生した事件として捉えるのではなく、身近なところ(須磨区)で生じた際にどのように対処するかについて都市部との比較を行いながら活発な検討がされた。

以下、シナリオ事例に対するグループワークの結果を報告する。

①「友蔵さんのどのような言動が気になりましたか」については、9 サブカテゴリー、3 カテゴリーに分類された。(表 3)

(以下、サブカテゴリー《 》、カテゴリー【 】で表す。)

### 【友蔵の生活像】

このカテゴリーは、参加メンバーらが、シナリオから想像した友蔵の日常生活のイメージである。サブカテゴリー《男の人は会社優先の生活になりやすい》《閉じこもりがちな生活》《プライドが傷つく》で構成されていた。

### 【家族との関係性】

このカテゴリーは、離れて暮らす息子夫婦との関係性や、亡くなった妻への思いなど友蔵の心情である。サブカテゴリー《息子夫婦との精神的距離感》《配偶者の死による気力減退》で構成されていた。

### 【地域との関係性】

このカテゴリーは、地域との交流が希薄となり、ついには悪徳業者の詐欺にあったにもかかわらず、誰にも助けを求めることができずにいるセルフ・ネグレクト予備軍ともいえる友蔵と地域の関係性である。サブカテゴリー《周囲の環境になじめない》《地域との交流が希薄》《詐欺にあう心情》《見守り対象から外れる》で構成されていた。

表3 第1回研修会グループワークにおける対象者の意見  
「友蔵さんのどのような言動が気になりましたか」

【友蔵さんの生活歴・心情】	
《男の人は会社優先の生活になりやすい》	男の人は仕事ばかりで近所に友人がいない 仕事の友人なんか、仕事が終わればそれで切れるもの 退職後に地域での居場所がない 男の人は仕事上のつきあいが優先されてきた
《閉じこもりがちな生活》	テレビを見ていたら一日がすむ。 家族の人数も減ると買物に行かないで済まそうと横着になる
《プライドが傷つく》	自分の失敗でプライドが傷つくことも、人を遠ざける一因 自分はまだしっかりしている気持があるが身体の衰えあり 自分の失敗や弱みを人に見せたくない
【家族との関係性】	
《息子夫婦との精神的距離感》	子どもには自分の弱みを見せたくない もし単身の母親だったら嫁や息子が様子を見に行くのではないか 息子夫婦にも自分たちの生活があるから十分なことができない 電話のやりとりだけではお互い本音が出せない 実際に顔を見ないとわからない部分も多い
《配偶者の死による気力減退》	頼りにしていた妻を失い無気力になる 心を開いて話せる身近な話相手がないさびしさがある 自分で家事をするのが苦手、おっくうに感じる
【地域との関係性】	
《周囲の環境になじめない》	歳をとってから新しい人間関係を築くのはしんどい 友人も亡くなったりで次第に交友関係も狭くなる 周囲の環境に適応できない自分を感じながら生きてゆく
《地域との交流が希薄》	日頃から近隣とのつきあいが少なかった 単身男性には周囲からの声かけもしにくかった 昔は近所のこともわかっていたが、今はわからない 妻がいればもっと周囲との交流があったかもしれない
《詐欺にあう心情》	友達もなく、セールスマンが来てくれて嬉しかった むしろ知らない人だから気が許せた 高齢者を狙った犯罪に関する情報を持っていなかった プライドがあるから騙されたことを他者に相談できない
《見守り対象から外れる》	年齢が若いと民生委員等の支援対象から外れることもある 近所づきあいもないと状況をつかみにくい 個人情報もあり、あまり立ち入れない

上記、【 】はカテゴリー、《 》はサブカテゴリー、右枠内は素データである。なお、素データは、代表的なものを示している。

②「隣人であればどのように対応したか」については、9サブカテゴリー、3カテゴリーに分類された。  
(表4)

【日頃のつきあい】

このカテゴリーは、須磨区の住民であれば、身近にいる友蔵と日頃どのようにかかわったかについてである。サブカテゴリー《近所同士気軽に声かけ合う》《地区組織を活用して見守る》《昔ながらのつきあいを大切にする》《転入者とのかかわり合いが難しい》で構成されていた。

【緊急時対応】

このカテゴリーは、友蔵が隣人であったならば、緊急時には近隣としてどのように対応するかである。サブカテゴリー《見守り推進員等に相談》で構成されていた。

【近所としてかかわる限界】

このカテゴリーは、友蔵が隣人であった場合、かかわる上での限界である。サブカテゴリー《单身男性にはかかわりにくい》《経済面の把握は困難》《防犯対策の必要性》《おせっかいの力》で構成されていた。

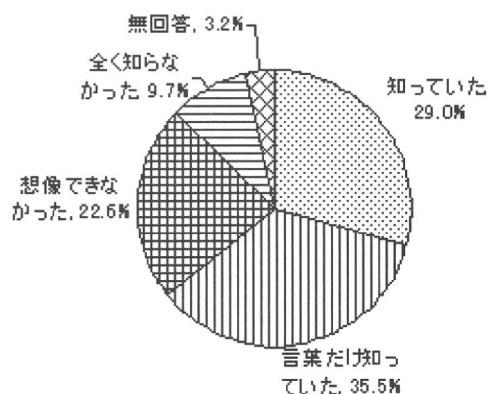
表4 第1回研修会グループワークにおける対象者の意見  
「友蔵さんが須磨区に住んでいたなら、どのように対応したか」

【日頃のつきあい】	
《近所同士気軽に声かけ》	日頃から気軽に挨拶したり、様子を見るため声かける 少しの立ち話などでも交流ができる
《地区組織を活用して見守る》	各年代の所属する自治会等で高齢者を見守る 小中学校のPTAでも見守り活動する 活動の不活発な地域と活発な地域の格差をなくす
《見守られる側の気持》	支えられる側の気持を理解する 支えられる側の心構えも大切 支えられる側の意識を変えてゆく取り組みも必要
《見守り連絡会の開催》	見守りボランティア間の共通理解・情報交換の場が必要 見守り推進員等専門職との連携の場となる 見守りボランティアの精神的負担の軽減にもなる
【緊急時対応】	
《見守り推進員等に相談》	民生委員や包括支援センターの専門職に相談する 緊急の場合は、その家に訪問してもらうよう依頼する
【近所として関わる上での困難】	
《单身男性にはかかわりにくい》	男性の対象者には話がしにくい 男性の対象者に対しては家庭内の状況は話題にしづらい
《経済面の把握は困難》	プライバシーにふれるので把握しにくい 状況に応じて、民生委員や見守り推進員に相談する
《防犯対策の必要性》	高齢者を狙う詐欺事件等に対する防犯対策が必要 研修会等で住民主体の学習も必要 見守りの中で防犯を意識することも大切
《おせっかいの力》	自分の住む地域に愛着を持っている住民が多い 昔ながらのおせっかい的気遣いも大切 拒否されても気長に挨拶や対応を続ける ことばだけでなく、実際に訪問等行動にうつす

### 3. 「研修プログラム」実施後のアンケート結果

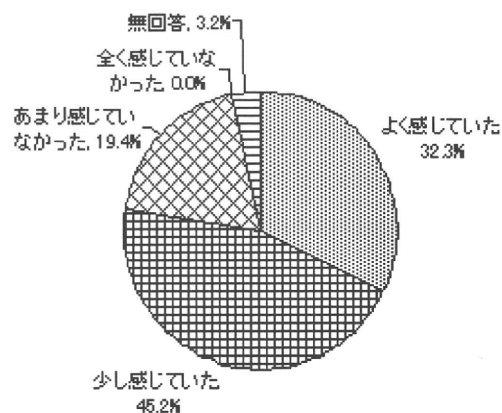
#### 1. セルフ・ネグレクトという言葉や状態があることを知っていたか

知っていたもの 9 名 (29.0%)、言葉だけ知っていたのは 11 名 (35.5%)、想像できなかったものは 7 名 (22.6%)、全く知らなかったもの 3 名 (9.7%)、無回答 1 名 (3.2%) であった。



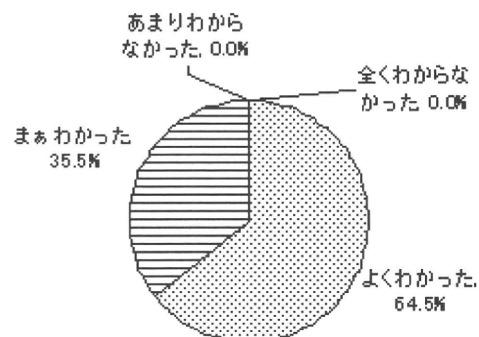
#### 2. セルフ・ネグレクト状態にある人の見守りの必要性を感じていたか

よく感じていたもの 10 名 (32.3%)、少し感じていたもの 14 名 (45.2%)、あまり感じていなかったもの 6 名 (19.4%)、無回答 1 名 (3.2%) であった。



#### セルフ・ネグレクトはどのような状態かわかったか

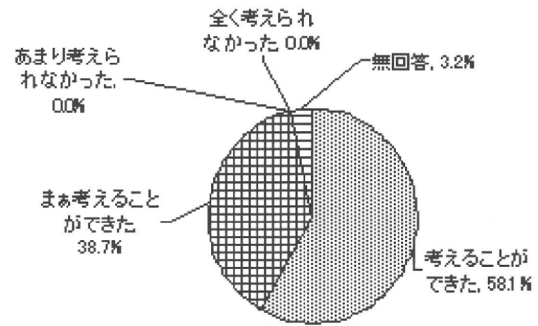
よくわかったもの 20 名 (64.5%)、まあわかったもの 11 (35.5%) 名であった。





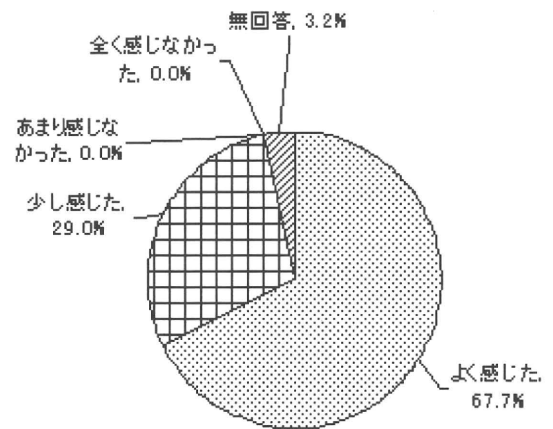
シナリオの「友蔵さん」の気持ちを考えることができたか

考えることができたもの 18 名 (58.1%)、まあ考えることができたもの 12 名 (38.7%)、無回答 1 名 (3.2%) であった。

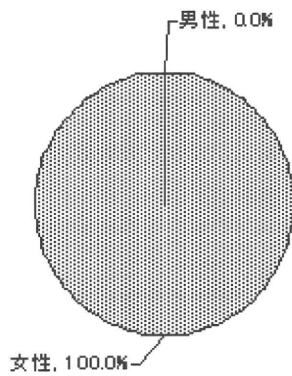


セルフ・ネグレクト状態の人の見守りの必要性を感じたか

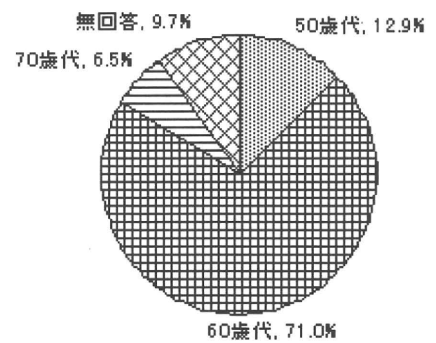
よく感じたもの 21 名 (67.7%)、少し感じたもの 9 名 (29.0%)、無回答 1 名 (3.2%) であった。



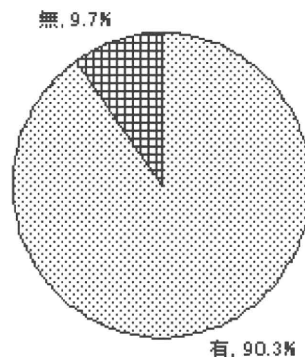
研修参加者  
性別



年齢



見守り活動対象者の有無



①今回の調査では、「セルフ・ネグレクト」ということば(概念)をある程度知っていた人 64.5%、全く知らなかった人 9.7%であった。ことば(概念)を理解してはいても、実際身近な問題として状況をイメージすることは困難であった。

②セルフ・ネグレクト状態にある人の見守りの必要性を感じている人は、32.3%、少し感じている人 35.2%、あまり感じていない人 19.4%、全く感じていない人は0%であった。

③上記1,2から、実際に今回の研修「ドラマティック・リリーフを用いた体験型研修」に参加することにより、100.0%(全員)の人が理解できたと回答している。(よくわかった 64.5%、まあわかった 35.5%)

④今回のような参加型研修を取り入れることで、具体的にイメージできなかつた状況を身近なところに置き換えてイメージし理解することができ一定の効果が得られた。

⑤本手法は、格別の物品準備や、台詞を上手に演技するというトレーニングも必要なく、簡便で有用な教育媒体となる可能性がある。地域の特性に応じて、登場人物や背景を変えてみると、より現実性、迫真性が高まる。また、取り組みにくいテーマの際にも、研修グループの雰囲気が活性するなどの波及効果も期待できる。

### 3)第2回研修会プロセス

第2回研修会では、研修プログラムに参加しての感想や学びの他、「見守りチェックシート」等を活用しながら進める日頃の見守り活動のあり方や判断基準についても再度意見交換(シートの構成内容や、実用性等についての具体的なアイデアや意見、感想含む)が発表された。なお、今回提出されたチェックシートの記述内容から、緊急性を要する事例は含まれていない。(いずれも、見守りメンバーにより継続しているケースに対して試用)

研修プログラムに参加しての感想としては、全体的にプログラムの有用性について評価された。特に、セルフ・ネグレクトの概念を身近な問題として捉えイメージすることができたとの意見が多かった。グループワークでは、須磨区に友蔵さんが存在したならどのような支援ができるかについて活発に意見交換がされた。また、近年身近に発生した詐欺事件等も取り上げられ、住民による主体的な教育・啓発活動の必要性についても提案された。

グループワークでみられた各グループの意見・感想は、表5に示すとおりである。

表5 研修に関する意見・感想

【身近な問題として捉えるために】
①有識者からの講義等も効果的であるが、今回のような身近に起こりそうな題材で研修すると、具体的な対処方法が考えやすい(今回のような身近に起こりうる題材を活用して広く住民に周知できるような研修やシステムが必要である。)
②小集団(各地区ごと)で研修会を行なう。(見守りチェック項目についての研修など含む)
③行政や社会福祉協議会等関係機関からの情報提供も、意識付けとして有効である。 ・小中学校から、て不審者情報などの情報提供を受けることもある。子どもから高齢者まで一貫した見守りシステムが必要である。
④住民同士での情報交換 ・高齢者詐欺などに関する適切な情報や知識を日頃の研修の中にも組み込む必要がある。 ・従来からの横の繋がりががあるので、声をかけやすい。
⑤見守りボランティアや関係者らで構成した「定例会の開催」を検討する必要がある。
【ドラマティック・リリーフ体験について】
具体例があり、理解しやすい。 (虐待に関してではなかったが)劇を演じて研修を受けたことがあり、対処方法含め考えることができた。

## 第4章 22年度のまとめ・提言

本年度(H22)の研究目的は、高齢者のセルフ・ネグレクトおよび孤立死を防ぐための地域見守り組織のあり方について、地域特性を踏まえながら住民とともに検討し、市町村行政等へ提言することであった。具体的には、1)住民ボランティア用の見守りチェックシート(基準)を作成する。2)見守り組織ボランティア育成への効果的な研修プログラムを作成する。

前年度より引き続き、本研究に協力して頂いている須磨区の見守り関係者ら 31 人を対象として、上記の目的にそって以下のとおり実施した。第 1 に、改訂版見守りチェックシート(21 年度試用の結果を踏まえ研究者らにより改訂を加えたシート)の試行及び、試行後のアンケート調査を実施した。第2に、21 年度に引き続き、研究者らにより見守り組織ボランティア育成への効果的な研修プログラムを作成し、実際に須磨区において実演し、施行後のアンケート調査を実施した。

本章では、見守りチェックシート試用後の調査結果の分析および、研修プログラム実施(グループインタビュー含む)結果より明らかとなったことおよび、提言を箇条書きにする。

### 1.見守りチェックシート試用後の調査結果の分析

#### 1)本チェックシートを活用した見守りの対象者について

##### 現状

- ①須磨区では、高齢者虐待に関する住民意識も高まってきている。地域見守り組織の特徴としては、あんしんすこやかセンターに配属されている見守り推進員と地域の友愛訪問グループメンバーや民生児童委員、保健師らが連携をとり積極的な活動が行われている。
- ②今回チェックシート試用の見守り対象者についてみると、最も多かった年代は、70-80 歳代で 56%と過半数を超えていた。世帯別で見ると一人暮らし高齢者が 76.95%となっている。須磨区では震災後の復興住宅(マンション)に住む一人暮らし高齢者も多い。須磨区の見守り活動においては室内の詳細な状況や経済的問題が把握しづらいという問題も常に抱えている。
- ③見守り対象者に身体不自由のある場合、下肢不自由が多かった。坂道や段差が多い環境であったり、高層住宅に居住していたりする場合、閉じこもりがちになることもあるので注意が必要である。また男性の一人暮らしで地域との交流が希薄な対象者も少なくなく、セルフ・ネグレクトに陥る危険性も高い。
- ④今回提出されたチェックシートでは、緊急連絡先不明が 51.3%と最も多く、連絡先がないが 2.6%であった。連絡先の内訳は、息子や娘で 6 割を占めているが、区外や県外等遠隔地の場合も多い。緊急連絡先不明の中には、見守り初期段階のため対象者と見守りメンバーとの信頼関係がまだ十分に築けていないものも含まれている。しかし、多くは、家族関係の希薄等で支援が受けられない高齢者である。

##### 課題

- ①見守り対象のハイリスクとなる「後期高齢者・一人暮らし・緊急連絡が困難」な方に関しては、日頃から地域包括支援センターの見守り推進員や民生児童委員と見守りメンバー間での情報の共有化や、緊急時の連絡網等の整備しておく必要がある。須磨区では、見守りメンバーと民生児童委員等との定期的な交流や学習会の機会を設けているので、そういった機会を活用して、相互の情報交換や、支援のための連携をより強化する必要がある。今年度課題とされた、見守りボランティアと関係者らでの構成された「定例会の開催」も今後の課題の一つである。

- ②須磨区のいくつかの地区では、見守りメンバーらが主催する行事(お花見等)へ閉じこもりがちな高齢者への参加を促している。また、男性の参加者や、男性の介護ボランティアも開拓することを課題とし活動が検討されている。男性ボランティアであれば、男性の得意や関心分野での役割(例:車での送迎、買い出し等)を担ってもらえるような工夫が必要である。また、見守られる側の意識を主体的なものへと変えてゆく必要があるという意見が出された。社会福祉協議会でも今後このような視点からも啓発活動が必要であると提案された。「おせっかい」の力が地域の見守りを支えることも確認された。
- ③昨年度に引き続き、「緊急連絡先不明」の背景や対象者の内面を把握する姿勢が大切である。緊急連絡先を得られない背景にある家族との関係性や、本人の心情を考慮した個別的な支援計画が必要となる。行政からの実態調査による把握も重要である。

## 2)「認知症を疑うサイン」「うつ状態」のチェック項目から明らかになったこと

### 現状

- ①「認知症を疑うサイン」では、状況が把握できているのは、日常の家事や近隣との交流からも比較的観察可能な「服装や身体の不潔」「道に迷う等の不審な行動」「トラブルメーカー」などであった。逆に状況がわかりにくいのは、本人の日常家事場面における計算能力や記憶力錯誤「日時を間違う、服薬を間違う等」「計算ができない」「通帳や財布を盗まれた」であった。
- ②「うつ状態」の観察では、うつ状態の早期アセスメントに有用なチェック項目に該当していたのは1項目のみであり「以前は楽にできていたことが、今ではおっくうに感じられますか」が該当したこの項目については、うつ状態(傾向)の症状として観察されることもあるが、老化に伴う変化として捉える面も含まれているので、引き続き訪問や電話をかけるなどでの見守りが必要である。しかしながら、うつ状態の項目は、全体的に無回答の割合が高かったことから、シートを活用しての判断が困難であったことが推測される。

### 課題

後期高齢者や認知症の高齢者が増えることにより、高齢者を狙った犯罪も増加する。須磨区においても近年は、オレオレ詐欺等高齢者をねらう犯罪がみられる。今後の見守り活動の中でこうした防犯対策も意識する必要がある。そのためには、行政側が住民に犯罪の現状や防犯に関する適切な情報を伝えるとともに、地域ごとに住民主体の学習会等を行うことも必要である。

この他、高齢者の交通事故や不慮の事故等も増えるため、今後はさらに警察との協働による見守り活動をすすめる。(警察の交通事故防止啓発活動の中に、高齢者の地域見守りの視点も組み込むなどの工夫)

## 2. 研修プログラムの実施結果と課題

### 1)セルフ・ネグレクト(予備軍含む)への支援に対する理解

第1回研修会では、セルフ・ネグレクトへの支援に関する体験型研修を実施した。研究者らで構成したシナリオに基づき、実際に劇を実演した後グループワークを行った。

体験を通して、参加者らは、下記のような学びを得たとともに今後の課題について検討することができた。

- ①友蔵さんの心情、状況を理解し共感することができた
- ・友蔵さんは、口では「大丈夫」と言っているが、内心はさびしい思いであることに気付くことができた。
  - ・友蔵さんは、決して誇張ではなく、一般的な日本人男性(高齢者)であることを認識した。また、誰にもこのような(セルフ・ネグレクト)は起こりうるということが理解できた。

・見守りを受ける側の意識を主体的なものに変えてゆくような働きかけも大切だと思う。

## ②地域の見守りの必要性を再認識できた

・「息子夫婦」と友蔵さんの関係性のあり方についての意見が多く出された。子どもとしての義務・責任も伴う一方、現実としては、電話で確認が精一杯ではないか、(むしろ、時々でも電話している息子は立派な方ではないかとの意見もみられた)といった身近な状況に置き換えながら意見交換された。さらに、「息子は息子でいっぱい生活」、だからたとえ子どもがいても、(別居していれば特に)近所での見守りが必要な場合も少なくないとの意見も出されていた。

・お互いになかなか踏み込めない関係でも、「友蔵さんとここに変な人が来ていた」と民生委員に言ってくれる‘おせっかい’的な近隣者がいると、それが非常に大切な情報になるとの意見も出された。

・地域の中に男性の高齢者も出ていける居場所をつくることも必要だと思う。

## ③セルフ・ネグレクトについて具体的にイメージできた

・部屋が汚い、不潔、ひきこもりなど、見守り上での視点が具体的に理解できた。

・見守り側においても、対象者の状況(妻の死、囲碁教室で浮く自分、詐欺など)引き金はいくつかあるが、それらをすべて把握している人はいないのであるから、情報を共有して見守りが有効にできるしくみが大切との意見が出された。

## 2)ドラマティック・リリーフ体験を取り入れた研修プログラムの有用性と課題

本研修プログラムの実施前には、「セルフ・ネグレクト」ということば(概念)をある程度知っていた人64.5%、全く知らなかった人9.7%という状況であった。また、セルフ・ネグレクト状態にある人の見守りの必要性を感じている人は、32.3%、あまり感じていない人19.4%、全く感じていない人0%であった。ことば(概念)を理解してはいても、実際身近な問題として状況をイメージしたり、その見守りの実際について検討することは困難であることがうかがえた。

しかしながら、実際に今回の研修「ドラマティック・リリーフを用いた体験型研修」に参加することにより、100%の人(全員)が理解できたと回答して(よくわかった64.5%、まあわかった35.5%)いることから、今回のような参加型研修を取り入れることで、具体的にイメージできなかつた状況を身近なところに置き換えてイメージし理解することができ一定の効果が得られたと考えられる。

本手法は、格別の物品準備や、台詞を上手に演技するというトレーニングも必要なく、簡便で有用な教育媒体となる可能性がある。地域の特性に応じて、登場人物や背景を変えてみると、より現実性、迫真性が高まる。また、取り組みにくいテーマの際にも、研修グループの雰囲気活性するなどの波及効果も期待できる。さらに今後は、前述のとおり必要性が高まってきている高齢者を狙う犯罪や防犯に関する住民主体の学習の場での活用も検討したい。

## 3. 今後の課題

・神戸市須磨区では、高齢者の健康指標の一つである要介護率等の改善もみられてきており、区内で継続して取り組んできた健康づくり活動や、高齢者の地域見守り活動が一定の成果をだしているところである。

・高齢者虐待防止法に基づく対応に関しても、あんしんすこやか係(須磨区役所・北須磨支所)、管内のあんしんすこやかセンター(地域包括支援センター)、社会福祉協議会等連携強化により個別具体的な支援がされている。また、専門職(医師・弁護士・社会福祉士・保健師や看護師等・警察官)間で組織した高齢者虐待防止ネットワーク委員会が毎年企画する高齢者虐待防止講演会では、地域の見守り関係者らの積極的な参加があり、一般的な知識ではなく具体的な支援方法に関するテーマに高い関心が寄せられている。本年度の研修プログラムのテーマであった「セルフ・ネグレクト」についても高い関心が寄せられ、体験型研修終了後も地域で取り組める具体的な対処方法が検討された。

- ・今後の課題の一つとしては、見守りボランティアや関係する専門職で構成された「定例会の開催」を各見守り地区で検討して実現化することである。
- ・本研究で作成した見守りチェックシートや研修プログラムを須磨区の実際の見守り活動においてより活用しやすいようにアレンジしたり改訂してゆくことも必要である。(既存の友愛ボランティア手帳や社会福祉協議会での研修プログラムとの適宜の組み合わせ等検討)須磨区では、地域住民のボランティア(友愛訪問ボランティア)による見守り活動が行なわれている。そこでは主に屋外からの見守り(夜間の屋内の点灯、洗濯物が干されているか等)を中心とした見守りが行なわれており、原則として見守り対象者の室内に入って話す・様子を見るということはなされていない。屋外からの見守りを継続する中で気になることがあれば、民生委員に連絡、そこからあんしんすこやかセンターとの連絡・連携をはかるというシステムが構築されている。以上より、本研究で作成したチェックシートは、見守りの視点を示すなど、主に初回訪問時での使用が最も有効ではないかと考えられる。

## 第5章 3年間（20～22年度）の考察・まとめ

本章においては、はじめに、各年度の主たる研究目的(下記 1-4 のうち)と方法及び、結果・考察の概要について記述し、次に、3年間の総括について報告する。

### 1. 各年度の研究概要（目的・方法・結果及び考察）

#### 1)平成 20 年度

##### ①本年度の主たる研究目的

須磨区(見守り専従者無し)において、地域特性別及び見守り専従者(行政等が雇用)有・無別見守り組織体制のあり方を検討することを主たる目的とし、a)住民への実態調査(アンケート調査)及び、b)見守り組織づくりを支援してきた専門職へのインタビュー調査・分析を実施した。

##### ②研究方法

a)実態調査(アンケート調査)の対象者は、本研究に協力頂いた見守り関係者(見守り組織ボランティアや見守り推進員等)140名である。郵送法による自記式質問紙調査とした。分析は、基本属性別等に、活動内容、見守り内容、孤立死防止に関する項目を比較・検討した。

b)インタビュー調査の対象者は、本研究に協力頂いた見守り関係者(地域包括支援センター等の専門職ら)9名である。研究者により半構成的面接を実施した。分析は、地区の特性を生かした見守りネットワークのあり方や、見守りの対象となる高齢者の特徴や支援上の困難や課題等について調査対象者らの把握している事例に基づきデータを収集し質的に分析した。

##### ③研究結果及び考察

実態調査(アンケート調査)から「地域特性別見守り組織特徴」「日常の見守り活動」「専門職の見守り支援の有無による活動」の3点について、それぞれ現在の状況(実態)と今後の課題を明らかにした。

##### ・地域特性別見守り組織特徴と課題

特徴:あんしんすこやかセンターに配置されている見守り推進員と地域の友愛訪問グループや民生児童委員が連携をとり積極的に活動が行われている。

課題:友愛訪問グループ等見守りの担い手は、女性が多く、近年高齢化しているため、次世代の育成が課題となっている。

##### ・日常の見守り活動の状況と課題

状況:①見守り活動の中でも、直接対象者の生活状況(身体・精神・社会的状況)が把握できる訪問活動が重視されている。

②近年、認知症の対象者も増えていることや、日頃の見守りでは元気に見えていた方の突然の死なども増加傾向にある。このため、健康面(身体的アセスメント)の判断を専門職と役割分担しながら支援する必要性が高まっている。③孤立死のハイリスクは健康面の他、閉じこもりや本人の支援拒否などの影響も大きい。④地域の見守り活動を阻害する3大要因は、本人からの拒否、本人の動向把握の困難性、自分ひとり(非専門家)での重責であった。

##### ・専門職の見守り支援の有無による活動の実態と課題

実態:須磨区内の地域見守りシステムの中で、保健福祉専門職(あんしんすこやかセンタースタッフ等)は、友愛訪問グループや民生委員の見守り活動に対して、個別にも後方支援を細やかに行っている。その結果として、介護保険等諸制度の有効活用や、病態悪化や急変など緊急時、適切に医療や施設入所へつなぐことができたケースも増えている。

課題:神戸市独自の見守り推進員や、各組織リーダーが協働し次世代の担い手の育成を行う見守り対象者の把握方法や対象の拡大の再検討や、見守り基準の再構成の検討。

インタビュー調査からは以下の内容の結果が得られ、課題を考察した。

実態:見守り推進員と住民ボランティアの連携による積極的な活動が展開されている。災害復興住宅

や高層マンションに住む独居高齢者の健康状況等への介入が難しい。

課題:次世代ボランティアや男性ボランティアの育成が必要とされている。また、高齢者の生活圏域で関わる商店や金融機関、コンビニなどを含めた顔の見えるネットワークの構築や、高齢者の実態把握が課題となっている。

## 2)平成 21 年度

### (1)本年度の主たる研究目的

前年度に実施した実態調査結果を踏まえ、本年度は、1)住民ボランティア用の見守りチェックシート(基準)の作成と、2)見守り組織構成員であるボランティアを育成する効果的な研修プログラムの作成を主たる研究目的とした。

### (2)研究方法

#### a)見守りチェックシート(案)の試用

研究者らにより作成した見守りチェックシート(案)の試用説明を行い、対象者は、前年度本研究に協力して頂いた見守り関係者 33 名(民生委員等)である。方法としては、高齢者虐待に関する研修会場の場を活用して、見守りチェックシート(案)の使用説明を行い、チェックシートを配布した。回収は、地域包括支援センターに依頼した。

#### b)効果的な研修プログラム作成

研究者らは、対象者が、セルフ・ネグレクト状態等の高齢者の早期把握のために求められている地域見守り組織のあり方(特に危機的状态に陥った本人及び介護者の早期発見の方法等)についてその重要性を再認識し、主体的に判断基準について検討できることを趣旨とした研修プログラムを作成した。研修会の対象者は、本研究に協力頂いた見守り関係者 31 名(民生委員等)、社会福祉協議会職員・地域包括支援センター職員である。目標にそったデータを収集するために、2 回の研修会を開催しグループインタビューを実施した。実施した 2 回の研修会は以下のとおりである。

・第 1 回研修会 6 月(研修プログラムの実施)ここでは主に、「セルフ・ネグレクト状態等の高齢者の早期把握のために求められている地域見守り組織のあり方(特に危機的状态に陥った本人及び介護者の早期発見等)」について検討した。

・第 2 回研修会 11 月、ここでは主に「見守り活動において活用しやすい見守り基準」について検討した。分析方法:本研究における研究素材は、①対象者の発言やグループインタビュー内容を録音したテープとフィールドノート記録より作成した逐語記録、②対象者より提出されたチェックシート内容(自由記事項含む)であった。これらは、2 回実施した研修会で得られた。具体的な分析方法としては、各研修のグループワークや全体発表での対象者の発言内容を IC レコーダに録音し、録音した内容をフィールド記録と照らし合わせて逐語録に書き起し、文脈がわかるように記録した。その後、複数の研究者で、できるだけ対象者の表現を活用しコード化した。それらのコードをもとに、サブカテゴリー、カテゴリーへと抽象化を進め分類を行った。

### (3)研究結果及び考察

見守りチェックシート試用後の調査結果(アンケート調査)の分析および、研修プログラム実施(グループインタビュー含む)結果より以下の点を明らかにした。

#### a)見守りチェックシート(案)の試用

本チェックシートを活用した見守りの対象者

現状:①須磨区では、高齢者虐待に関する住民意識も高まってきている。地域見守り組織の特徴としては、あんしんすこやかセンターに配属されている見守り推進員と地域の友愛訪問グループメンバーや民生児童委員、保健師らが連携をとり積極的な活動が行われている。

②今回チェックシート試用の見守り対象者についてみると、最も多かった年代は、80 歳代が 15 人(58%)と過半数を超えていた。須磨区では震災後の復興住宅(マンション)に住む一人暮らし高齢者も多い。須磨区の見守りグループメンバーや民生児童委



員、保健師らが連携をとり積極的な活動が行われている。③緊急連絡先不明が、13人(50%)と最も多く、「連絡先がない」が、2人(8%)であった。連絡先の内訳は、息子や娘で7割を占めているが、区外や県外など遠隔地の場合も多い。緊急連絡先不明の中には、見守り初期段階のため対象者と見守りメンバーとの信頼関係がまだ十分に築けていないものも含まれている。しかし、多くは、家族関係の希薄等で支援が受けられない高齢者である。

課題:①見守り対象のハイリスクとなる「後期高齢者・一人暮らし・緊急連絡が困難」な方に関しては、日頃から地域包括支援センターの見守り推進員や民生児童委員と見守りメンバー間での情報の共有化や、緊急時の連絡網等の整備をしておく必要がある。須磨区では、見守りメンバーと民生児童委員等との定期的な交流や学習会の機会を設けているので、そういった機会を活用して、相互の情報交換や、支援のための連携をより強化する必要がある。

②須磨区のいくつかの地区では、見守りメンバーらが主催する行事(お花見等)へ閉じこもりがちな高齢者への参加を促している。今後は男性の参加者や、男性の介護ボランティアも開拓することが課題となっている。男性ボランティアであれば、男性の得意や関心分野での役割(例:車での送迎、買い出し等)を担ってもらえるような工夫が必要である。

③「緊急連絡先不明」の背景や対象者の内面を把握する姿勢が大切である。緊急連絡先を得られない背景にある家族との関係性や、本人の心情を考慮した個別的な支援計画が必要となる。行政からの実態調査による把握も重要である。

#### 基本編チェック項目から明らかになったこと

現状:①基本編の中で「この方について気になっていること」の内容を分析しカテゴリー化すると、《近隣関係が希薄》《転倒の危険》《病状の悪化》《夫の死や入院》《高齢者の運転が心配》が抽出された。

②「これらに対して今後どうしますか」という問いに関しては、「とりあえず現状を見守る」や「普段どおり声をかけてゆく」が23人(88.5%)と9割近くであった。

課題:①特に、病状の悪化(病変)や転倒の危険などは、通院状況等治療状況の把握や、はやめに見守り推進員等専門職との連携が必要である。

②今回提出いただいたシートの対象者は、以前からゆるやかな見守りを継続している対象者が多かったため、追跡の必要な事例はみられなかった。しかし今後本シートを活用していく上では、地域包括支援センターや在宅ケア機関や行政がかかわっていない事例も出てくることが予測される。これらのことから、関係機関の専門職は、見守りメンバーからの情報を受けた場合、訪問調査を行うなどし、適切な支援につなげることが必要である。

#### その他気になることから明らかになったこと

現状:①「息子が同居している場合、見守りの対象から除外されるが、その高齢者の方が「認知症では？」と思われる場面があり、また、息子さんにも「何か問題があるように思われる」といった、多問題が潜在しているような事例に直面していた。

②「夫が妻を介護している高齢世帯で夫の介護方法が心配。妻がゆっくり時間をかければできることでも、夫がサッサと片づけているため、妻もだんだん夫任せとなってしまっている。」

課題:①ハイリスク高齢世帯の早期発見と継続的な支援は、専門職と住民による見守り活動の重層的支援が必要である。上記①のような事例であれば、専門職による状況把握や関係者によるケア会議等を適切な時期に行い介入を検討する必要がある。介護者や同居者の健康面のアセスメント(精神症状も含め)も重要であり、状況に応じて治療や福祉サービスにつなげることが必要となる。

②須磨区では社会福祉協議会や住民組織による、男性介護者を対象とした交流会や料理教室にも取り組みは始めている。今後の課題の一つとして、男性ボランティアの育成がある。前述したとおり、男性の特技や関心を生かした役割を工夫することも必要となる。また、近年は都市部では、オレオレ詐欺等高齢者をねらう犯罪が増加している。今後の見守り活動の中でこうした防犯対策も意識する必要がある。

#### b)研修プログラムの実施結果と課題

##### 男性介護者への支援の現状と課題

第1回研修会では、男性介護者が実母と介護心中に至った事例についてDVDで視聴し研究者らで構成したプログラムに沿ったグループワークを行った。今回のグループワークではまず、男性介護者の考え方や意識を把握した上で、地域で支援する際の留意点や課題について検討した。男性介護者一般に観察される共通点が以下のとおり指摘された。①男性介護者(夫または息子)は、まじめな性格の者が多く献身的に介護する。②要介護状態にある女性(後期高齢者でありかつ、認知症やねたきりなど何らかの障害を持っている)を介護している。③他人に頼ろうとせず、孤立的な状況で介護を続けている傾向にある。④家事はにがて、つらいと思い、どこまでやり通せるか不安を感じている。さらに、上記のような特徴を持つ男性介護者に対して、見守り活動等へのためらいや遠慮などの意識を変革し、利用を促進していくことが必要であることを再確認できた。今回のような悲惨な事件の背景には「介護疲れ」がある。グループインタビューの分析結果からも加害者(本事例ではK氏)は、まじめな性格が多く、介護を独りで担っており、心身共に介護負担が積み重なった結果として本事件が発生している。グループワークの検討から、男性介護者への日頃からのサポートが必要であること、地域の中での孤立を防ぐことが重要であること、住民による支援の限界を見極め、ハイリスク高齢世帯の早期発見には特に専門職と住民ボランティアの重層的支援が必要であることなどが示唆された。さらに、対応策として、女性中心で構成されている現在の見守りボランティアに男性の協力を求める方策や、社会福祉協議会を中心とした男性介護者の集いの企画、見守り対象に入りにくい(今回のK氏の事例のような)世帯を把握するための見守り判断基準の活用といった提案がされた。いずれも日頃の見守り活動体験を通して出された具体的提案内容であった。

##### 経済的虐待や経済的困窮の早期発見・早期対応の現状と課題

次に、経済的困窮状態に焦点があてられた。本事例においてK氏が明日の食べるものにも事欠く困窮状態となり事件が発生するまでを客観的に見ると、回避できる可能性はゼロであったのだろうか。グループワークでは、経済的困窮の要因について、社会的側面とK氏の内面から検討した。多く出た意見は、K氏の経済的状態の把握の難しさや、生活保護申請手続き上の問題点の指摘であった。さらに、K氏が退職する以前からある程度将来予測して必要なサービスの利用や、生活保護申請に向けての準備が必要であったとの意見も出された。また、今日の社会情勢からすると、離職や解雇されたり、長らくニートや閉じこもり状態であった息子がいる時点から、母親等の介護者となるケースも少なくないと思われる。そうした男性介護者に、慣れない介護からくる身体的疲労や、経済的困窮が積み重なった場合、身体的虐待や傷害致死など悲惨な事件が発生する可能性もある。経済的状況は特に個人のプライバシーに深く関わる問題であるため、日頃からの交流や信頼関係が築けていないと介入が困難であることや、介護者(ここではK氏)との信頼関係を築く上で、彼にとって本当に負担になっている事柄は何かを見極めることが必要であることがグループワークでも検討された。特に就労していた息子が離職し慣れない介護をはじめ、介護に関する十分な知識や技術を持たないまま仕事場面でやり方を応用するような介護は長く継続することは困難である。そのうえ、日々認知症が進み、病状が悪化する母親を受容することが苦痛となるだろう。

見守り活動の中で、経済的問題に触れる以前に、そのようなコミュニケーションが必要であるかもしれない。また、要介護状態の高齢者が権利として介護サービスを利用することができるということを伝えることも必要である。

生活保護がナショナル・ミニマムの具体的基準である。しかしながら、K氏親子の例にもみられるように、生活保護その他の社会保障・福祉制度を利用できず、その生存権が保障されない現実もある。地域見守りに関わる関係者が、生存権は、万人が無条件に保障される権利であることや、社会関係からの孤立や排除が、低所得層の健康悪化の要因となることを再認識することが大切である。

#### (4) 今後の課題

神戸市須磨区では、高齢者の健康指標の一つである要介護率等の改善もみられてきており区内で継続して取り組んできた健康づくり活動や、高齢者の地域見守り活動が一定の成果をだしているところである。高齢者虐待防止法に基づく対応に関しても、あんしんすこやか係(須磨区役所・北須磨支所)、管内のあんしんすこやかセンター(地域包括支援センター)、社会福祉協議会等連携強化により個別具体的な支援がされている。また、専門職(医師・弁護士・社会福祉士・保健師や看護師等・警察官)間で組織した高齢者虐待防止ネットワーク委員会が毎年企画する高齢者虐待防止講演会では、地域の見守り関係者らの積極的な参加があり、一般的な知識ではなく具体的な支援方法に関するテーマに高い関心が寄せられている。本年度の講演会では、本研究代表者から、見守り判断基準とチェックシート試用に関する紹介がされたところ、包括支援センターのスタッフや見守りボランティアグループから、見守りチェックシートの実用化に関する質問や意見が多く出された。次年度に向けた課題は、本年度各地で試用された結果を踏まえ、実用化に向けた修正と精度を加えることである。

## 2. 20～22 年度の総括

本研究を通してセルフ・ネグレクト等見守り組織について次の事項が明らかになった。

- 1) 見守り専従者(地域包括支援センター等に配属された専門職)がある体制は、見守りボランティアが活動する上で、安心感を与え、活動の活発化に繋がっていた。また、見守り組織体制等に過疎集落市町村や政令都市における IT 導入においては、併せて住民の見守り組織が不可欠であることが判明した。

須磨区では、見守りボランティアの活動が活発であり、見守り専従者(地域包括支援センター等に配属された専門職)や、区役所の保健師等専門職との連携のもと活動が展開されている。具体的に説明すると、区のアんしんすこやか係や区社協、区内の地域包括支援センターが中核となり、地域の住民見守りボランティア組織との密接な連携のもとに区内の 65 歳以上の高齢者を中心とした多様なニーズに対し総合的支援が展開されている。その活動の中には、区社会福祉協議会や区役所スタッフによって、民生委員や見守りボランティアを対象とした研修会や定例会の他、日々の見守り活動に対する個別具体的な助言等がなされている。

- 2) 本研究の目的のひとつとして、住民ボランティアが活用しやすい「見守りチェックリスト」の作成があった。19 年度の基礎調査及び数回のリスト施行を重ねて本年度はより簡易かつ観察もれを少なくするような有用なリストの作成を試みた。研究者によりチェック項目を精選し、住民ボランティアが、チェック項目にそって観察を行えば、現状の見守りを継続することで良いのか、地域包括支援センターへ相談をした方がよいのかなど判断しやすいよう工夫した。また、見守り対象者のフェイスシート欄に経済状態、移動手段を加えた。経済状況に関しては潜在した問題があることも多いため、不明の場合でも、その他の観察項目も踏まえ気になる点があれば、地域包括支援センター等専門職との連携につなげる視点も必要となるであろう。移動手段を把握することは、本人の自立度や将来的な閉じこもり防止支援にも生かすことができる。さらに、本チェック項目を活用することにより、住民ボランティアにとって判断の難しい認知症やうつ状態のサインに早期に気づけるようにした。

須磨区では、地域住民のボランティア(友愛訪問ボランティア)による見守り活動が行なわれている。そこでは主に屋外からの見守り(夜間の屋内の点灯、洗濯物が干されているか等)を中心とした見守りが行なわれており、原則として見守り対象者の室内に入って話す・様子を見るということとはなされていない。屋外からの見守りを継続する中で気になることがあれば、民生委員に連絡、そこからあんしんすこやかセンターとの連絡・連携をはかるというシステムが構築されている。以上より、本研究で作成したチェックシートは、見守りの視点を示すなど、主に初回訪問時での使用が最も有効ではないかと考えられる。

- 3) ボランティア育成研修会プログラムは、住民のセルフ・ネグレクト高齢者等の訪問の必要性と併せ「連携」「おせっかい」など、住民の主体的見守り姿勢育成に繋がっていた
- 4) 本研究で実施した見守り先進地域視察の組織発展過程の分析は、新たな見守り組織構築への具体的示唆に繋がった。須磨区では前述したとおり、地域包括支援センターや民生児童委員らの連携がされていることや、小学校区(PTA)も巻き込んだ子どもから高齢者まで、住民のつながりを大切に活動が展開されている。
- 5) 政策への反映

団塊の世代の高齢化に加え、経済が失速状態にあるわが国においては、セルフ・ネグレクト状態等の中・高齢者は今後一層増えるものと考えられる。このようなセルフ・ネグレクト状態の中・高齢年齢者の早期発見に住民ボランティアによる見守り組織育成が急がれる。しかし、平成 21 年度厚生労働省実態調査では、早期発見・見守りネットワーク未構築市町村は 33%である。本研究成果は、市町村及び地域包括支援センターが担うセルフ・ネグレクト状態等中・高齢年齢者の早期発見・把握に役立つものと考えられる。